

四 露国ニ対スル兵器軍需品供給関係一件 七五

防寒被服

五、〇〇〇

軍服

五、〇〇〇

軍靴

五、〇〇〇

(附記)

十二月二十三日シベリア派遣第三師団長登山梨參謀次長宛

電報武藤第六六号

極東露軍ノ武器彈藥供給要請ニ応ズルヲ可トスベキ旨意見

開陳ノ件

二十二日發武藤第六六号電

(写十二月二十四日外務省接受)

一、既ニ報告セシ如ク小官「オムスク」着任後ニ於ケル当地ノ空氣ハ概シテ排日のニシテ? 「ホルワツト」ノ如キモ「セメノフ」攻撃ニ関聯シテ頻リニ日本ニ対スル反感の意向ヲ有スルモノ多カリシニ最近ニ至リ政府委員等ノ態度口吻其他新聞ノ論調等漸次親日のニ傾キ來ル徵アリ小官ハ此機會ヲ利用シ「オムスク」政府ノ懷柔ニ努メントス、去ル十七日「イワノフ リイノフ」ノ極東赴任ヲ機會トシテ軍總司令部等ノ主ナル將校二十余名ヲ晚餐ニ招待シ日本ノ露国ニ対スル誠意ニ関シ説明スル所アリシニ一同大ニ喜悅ノ狀ヲ表シタリ

## 事項五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

七六 三月八日

在英國珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

英国皇帝ヨリ元帥称号相互贈呈ニ御満足ノ旨

及戰爭遂行ノ御決意等談話ノ件

第二四〇号

本使夫妻三月八日当国兩陛下ヨリ宮中ノ午餐ニ召サレタルガ四方山ノ御閑談中皇帝陛下ハ過般ノ元帥称号相互贈呈ニ言及遊バサレ日本国陸軍最高ノ班位ニ列セラレタルハ朕ノ名譽ナリトノ御沙汰アリタルニ付本使ハ本件ハ日本国上下ニモ深大ノ印象ヲ与ヘ議會開会当日ニ於ケル總理大臣ノ演說中ニモ特ニ重キヲ置キテ言及シアル旨申上ゲタルニ頗ル御満足ノ様子ニ御聞取リアリ時局ニ関シテハ戰爭ノ長引クハ悲シム可キ所ナルモ各国民共随分戰爭ニ疲レ居ル此ノ場合一度円卓會議(講和會議ヲ意味セラル)ノ開催ヲ見タル曉ニハ再び戰鬪続行ノ義ハ到底覺束ナク結局独逸ノ希望通りノ和議ヲ調フルノ外アル可カラズ從テ斯ル不満足ノ講和

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

一三〇

去ル十九日「ウラル」「カサツク」代表者四名小官ヲ訪ヒ日本政府ニ対シ兵器彈藥ノ援助ヲ請ヒタルヲ以テ總司令部ヲ經テ具体的ニ申出ツヘキ旨指示オケリ又今二十一日「セミレチンスクカザツク」代表者(憲法大会議員)「ホルワツト」來訪シ野砲四門其他小銃彈二百萬發機関銃若干ノ援助ヲ請ヘリ彼等代表者が打チ明ケテ語ル所ニヨレバ對日本感情ハ一二週間前ヨリ漸ク良好ニ變化シ始メ日本ニ信頼スル決心ヲ起スニ至レリト雖モ公共団体ニ於テハ未タ毅然タラサルモノ多シト依テ日本ハ此機ニ於テ武器ト援助ノ要求ニハ可成迅速ニ之ニ応シ以テ露国ニ対スル誠意ヲ示サバ同国ノ對日本感情ハ此ニ一變シ彼等ノ日本信頼ノ念ヲ堅クシ日本ノ威信ヲ確立スルニ大ナル効果アリト信ス

東京、浦潮、ハルビン、濟ミ

ヲ避クル為飽迄戰爭ヲ繼續スルノ外途ナシト仰セラレ尚日本ナリ英國ナリハ今次ノ戰爭ニ於テ何等損失ヲ受ケ居ラズ我々丈ノ戰爭ナランニハ講和ノ事モ容易ナルベケレドモ仏蘭西、伊太利、白耳義、塞爾比等ノ与国モアル以上ハ是非共満足ナル一般的講和ヲ得本戰爭ヲ終結セシムル事ヲ旨トスルノ外ナシト附言遊バサレタリ露国ノ現状ニ對シテハ其日々急転ノ乱脈狀態ヲ痛嘆アラセラレ独逸ノ横暴ニ對シテハ相変ラセラレズ御憤慨ノ御口調ニテ痛ク敵愾ノ御感情ヲ有セラルル様印象セラレタリ

七七

在英國珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

天皇陛下二元帥杖捧呈ノ為陸軍大將パジェツ

トラ派遣スル旨英國外務省ヨリ内報ノ件

第二四四号

往電第七七号ニ関シBaton捧呈ノ特使派遣ニ決シタルカ本来元帥其任ニ当ル筈ナルモ目下派シ得ルモノナキニ付陸軍

七六 七七

一三一

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件  
将 Sir Arthur Paget (随員一二名) ヲ遣ハスコトト  
リ帝国政府ニ右通知ト共ニ日取問合セ方在日本英国大使  
訓電済ノ旨英国外務省ヨリ内報アリ

七八 三月十一日 本野外務大臣ヨリ  
波多野宮内大臣宛

天皇陛下へ英国陸軍元帥杖捧呈ノ為バジエツ  
ト大将来朝ニ関スル件

附屬書 三月七日附在本邦英国大使ヨリ本野外務  
大臣宛書翰写  
バジエツト大将来朝ノ件

人送第二四号  
今般

天皇陛下へ英国陸軍元帥杖捧呈ノ為同国陸軍大將ライト、  
オノラブル、サー、アーサー、バジエツト随員一兩名ヲ從  
へ来朝可致儀ニ関シ在本邦英国大使ヨリ本国外務大臣ノ訓  
電ニ基キ別紙写ノ通知有之候間委細ハ右ニテ御承知相成  
度尚本件回答方ニ関シ何分ノ儀御回示相成度此段申進候也  
(附屬書)

三月七日附在本邦英国大使ヨリ本野外務大臣宛書翰写  
バジエツト大将来朝ノ件

headed by an Officer holding the rank of Field-  
Marshal, were it not that under present circum-  
stances it is unfortunately found to be impossible  
to detach for the duty an Officer of such rank.  
I avail myself of this opportunity, Monsieur le  
Ministre, to renew to Your Excellency the assurance  
of my highest consideration.

(Sgd.) Conyngham Greene  
H.B.M. Ambassador.

His Excellency  
Viscount Ichiro Motono,  
H.I.J.M. Minister for  
Foreign Affairs.

七九 三月二十日 在英国珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

バジエツト陸軍大將ヲ派遣ノ機会ニ別ニ特派  
使節ヲ日本ニ派遣スルコトニ付英国外相ヨリ  
相談アリタル件

第二七二号 極秘

往電第二七一号談話中「バルフォア」氏ハ之ハ貴大使ヨ  
リ政府へ御報告ヲ願フ事件ニハアラサルカ実ハ今回元帥称  
五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

七八 一三三  
British Embassy,  
Tokio.  
March 7, 1918.

Monsieur le Ministre,

In connection with the bestowal in January last  
by His Majesty The King, my August Sovereign,  
upon His Majesty The Emperor of Japan of the  
rank of Field-Marshal in the British Army I have  
the honour to acquaint Your Excellency, under tele-  
graphic instructions this day received from His  
Britannic Majesty's Principal Secretary of State for  
Foreign Affairs, that a Special Mission, which will  
consist of General the Right Honorable Sir Arthur  
Paget, G.C.B., K.C.V.O., accompanied by one or two  
Aides-de-Camp, will proceed to Tokio to deliver the  
Bâton of Field-Marshal to His Imperial Majesty as  
soon as my Government are informed of the ap-  
proximate date on which it would be convenient for  
this Mission to arrive in Tokio.

In making the foregoing communication to the  
Imperial Government I am at the same time directed  
to explain that the Special Mission would have been

号捧呈使トシテ「バジエツト」大將日本派遣ノ機会ヲ以テ  
我政府ニ於テ別ニ特派使節 (special mission) ヲ日本ニ  
遣ハサントスルノ内議アリ既ニ「グリーン」大使ニ發電日  
本政府ニ相談ナク不取敢同大使一己ノ意見ヲ申立ツヘキ様  
内訓シ置ケルカ尚貴大使ノ考ヘ如何拝承シ度シト語ラレタ  
リ右ハ本使ヲ介シテ夫レトナク帝国政府ノ内意ヲ至急承知  
セントスルノ意ニ出テタル談話ト推察シタルヲ以テ本使ハ  
事柄自身ハ至極結構ナリ要ハ時期ト方法ノ如何ニ在ルヘシ  
ト答ヘタルニ「バルフォア」氏ハ如何ニモ然リ今回ノ如  
キ軍事上ノ儀札ニ関スル使節ト共ニ右様ノ特派使節ヲモ同  
派スルコトハ何等カ他ニ別種ノ意味合アルヤノ疑ヲ外間ニ  
懷カシムルノ虞モナシトセサルヘキカ何レノ途尚貴大使ニ  
於テモ考置ヲ請フト述ヘ尚右特使ニハ如何ナル人ヲ充テラ  
ルヘキ考ナリヤト本使ノ問ニ対シテハ勿論日本要路ノ政治  
家ト対等ノ地位ニテ応待シ得ヘキ人物ヲ以テスル積リナリ  
ト答ヘラレタリ本使ハ兎ニ角貴意ノ如ク尚熟考ノ末卑見申  
出ヅヘシト答ヘ置ケルニ付帝国政府ノ御内意及御都合大体  
御回電相仰度左スレハ本使ノ意見トシテ程ヨク申入ルルコ  
トニ致スヘシ

七九

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

ハ〇 三月二十二日 在英国珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

英国政府力特派使節ヲ日本ニ派遣ノ目的ニ関  
スル観測報告ノ件

第二七六号(極秘)

往電第二七二号ニ関シ客年夏元在伊大使館附山本海軍大佐  
当地来遊中当時外務省極東部長ノ地位ニ在リシ「グレゴリ  
ー」(同氏ハ在「バチカン」英国公使館書記官在職中山本  
ト親交アリ殊ニ兩人共同シク加特力教徒タル關係上山本ニ  
向テハ随分隔意ナキ内情談ヲ為スコトアリ)ハ山本ニ対シ  
日本ノ真意ニ関シテハ從來英国側ニ於テ兎角懸念ノ次第モ  
アリタルガ近來本戦争ニ対スル日本ノ誠意追々事実ニ表彰  
セラルト共ニ前述ノ懸念モ段々薄ラギタリ政府要路モ満  
足シ居レルガ日英間ニハ尚調節妥結ヲ要スル幾多ノ問題モ  
アリ又東洋ニ於ケル日英關係ノ真相日本ノ事情等ニ付テハ  
英国政府ニ於テモ實際不案内ノ点多ク旁々以テ是等ノ点親  
シク現場ニ於テ研究ノ意味ヲモ交ヘ此際日本ニ特派使節ヲ  
派遣シテハ如何カト考ヘ居レリト語リタルコトアリ其後年  
末ニ至リ「タイムス」主筆「スチード」モ本多ニ対シ英国

ミ特派派遣ノ上ハ恐ラク本件ニ関シテ尚我方ノ再考ヲ求メ  
ントスルコトアルベキ様思考セラル以上差向キ観測ノ次第  
御参考迄ニ申進ス

ハ一 三月三十一日 本野外務大臣ヨリ  
在英国珍田大使宛(電報)

英国政府ノ特派使節日本派遣ハ外間ニ疑惑ヲ  
生ズル虞アルニ付使節ノ使命確メ方訓令ノ件

第一七四号 極秘

貴電第二七二号英国政府力特派使節ヲ派遣セムトスル動機  
及同使節ノ帶同スヘキ使命ハ未タ十分明瞭ナラサルニ付貴  
官ハ今一応英国外務大臣ト会見セラレ先ツ可成其真相ヲ確  
メ更ニ御電報アリタシ

大体ニ於テ若シ右使節派遣ノ目的カ單ニ兩國間意見ノ交換  
ト云フカ如キ一般の性質ヲ有スルニ止マリ別ニ外間ニ公表  
シ得ヘキ特定ノ使命ナキニ於テハ世上種々ノ臆測ヲ逞クシ  
浮説百出シテ為ニ兩國政府ニ累ヲ及ホスニ至ルコトアルヘ  
ク殊ニ目下西比利亜出兵問題ノ喧伝セラルルニ当リ右使節  
ノ使命ヲ之ニ関聯シテ解釈シ恰モ英国政府カ本件ニ関シ帝  
国政府ニ圧力ヲ加ヘムトスルノ意アルカ如ク誣フルモノナ

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

ハ〇 一三四

政府ノ情報ニ依ルニ日本ニ於ケル独逸ノ「プロバガンダ」  
随分熾ニ行ハレ居ル模様ナリ右「プロバガンダ」ハ英国ニ  
於ケル夫レト齊シク裏面的且間接ノ方法ニテ行ハルモノ  
ニテ容易ニ証跡ヲ捕捉シ難キモ独逸ガ極力日本ニ於テ「プ  
ロバガンダ」ヲ行ヒ居ルハ疑ナキモノノ如ク就テハ右対応  
策トシテ有力ナル特派使節(Big and strong special mis-  
sion)ヲ日本ニ派遣ノ義英国側ニ於テ考量中ナリト内話  
シタルコトアリ要スルニ特派使節派遣ノ事ハ大分久シキ以  
前ヨリ英国政府内部ノ議ニ上リ居リ今回ノ元帥記号捧呈使  
差遣ノ機会ヲ以テ愈々右実行ノ詮議ニ入リタルモノト観測  
セラル而シテ右特派派遣ノ目的ハ主トシテ日英間ノ意思疏  
通並本邦ノ内情国論ノ趨向等ノ視察ニ依リ将来ノ政策ニ資  
セムトノ大体的使命ニアルベク対西比利亜問題ノ如キモ特  
使派遣ノ上ハ自然我要路トノ談話ニ上ルベキモ此問題アル  
ガ為殊更使節派遣ヲ思立チタル次第ニアラズト思惟セラル  
尚我巡洋戦艦借受ケノ義ハ英国側ニ於テ今以テ全ク断念シ  
居ラザル様子ニ見受ケラルル処露国波羅の艦隊モ既ニ事実  
上独逸ノ手ニ落チ黒海艦隊モ近ク同様ノ運命ニ達著スベク  
從テ敵ニ対スル優勢保持益々切要ヲ告ケツツアル実勢ニ鑑

キヲ保セス斯ノ如キ疑惑ヲ招クハ兩國ノ為極メテ不得策ト  
信スルヲ以テ貴官ハ英国外務大臣ト会見ノ節此ノ趣旨ヲ含  
ミ可然御応対アリタシ

ハ二 四月三日 在英国珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

英国ノ特派使節日本派遣ノ目的及元帥称号捧  
呈ノ為アーサー、オブ、コンノート殿下派遣  
ノ考案ニ関シ英外相内話ノ件

第二九二号 極秘

往電第二九一号要談後本使ハ往電第二七二号外務大臣談話  
ノ件ニ言及シ恰モ一兩日前ノ紙上ニ掲載セラレタル「タイ  
ムス」東京電報中西比利亜出兵問題ニ関スル本邦輿論ノ趨  
向トシテ one of the strongest deterrents is any suspi-  
cion that Japan is acting at the behest of allies トノ  
一節ヲ引用シ本使ノ私見トシテ貴電第一七四号御内訓ノ趣  
旨ヲ程ヨク開陳シタルニ「バルフォア」氏ハ成程右様ノコ  
トモ之アルヘキカ英国側ノ目的トスル所ハ日英間ノ意思疏  
通兩國ノ親善助長及一般の性質ニ過キス素ヨリ別ニ外間  
ニ公表シ得ヘキ特定ノ使命ナキ次第ナリト述ヘ更ニ語ヲ転

ハ一 八二 一三五

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

シ之ハ極メテ秘密ニ御取扱アリ度カ実ハ其後尚考量ノ結果目下ノ内議ニテハ元帥ノ称号捧呈使トシテ「プリンス、アーサー、オブ、コンノート」殿下ヲ差遣シ其随員ニ戦場ノ閱歴アル老功ノ一將軍ト曩ニ御話セルカ如キ一政治家ヲ附スルコトトスル積ナリ右ナレハ貴大使ノ云ハレタル如キ外間誤解ノ虞モナカルヘシ兎ニ角英国側ニテハ右様ノ考案ニテ既ニ派遣ノ準備ニ取掛ラントスル場合ナリトテ本使ヨリ右ニ対スル帝國政府ノ内意程ヨク問合セクレ度且可成速ニ回報ヲ得度旨繰返シ希望セラレタルニ付何分ノ義御電訓ヲ請フ

八三 四月八日 在英国珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

英国外務大臣ヨリ特派派遣ニ関スル日本政府

ノ回答督促ノ件

第二九六号 至急

往電第二九二号末段ニ関シ一昨六日「バルフォア」氏ト某所ニテ会合ノ節同氏ヨリ我政府ヨリ回報ノ有無尋ネラレタル処今八日又復電話ニテ問合アリ英国政府ニテ余程急ギ居ル様子ニ付成ルヘク至急何分ノ御電訓ヲ切望ス

八三 八四 八五

一三六

八四 四月十日 本野外務大臣ヨリ  
在英国珍田大使宛(電報)

特派使節派遣ニ関スル英国外務大臣ノ申出ニ  
帝國政府ニ於テ異存ナキ旨回答方訓令ノ件

第一八八号

貴電第二九二号ニ関シ「コンノート」殿下御来朝ノコトトモナリ其ノ随員中ニ相当政治家ヲ加ヘラルルニ於テハ別ニ特派使節ヲ差遣セラルルトハ異ナリ往電第二七四号所述ノ如キ疑惑ヲ招ク虞ナカルヘキニ付「バルフォア」氏ノ申出ニ対シ帝國政府ニ於テ異存ナキ旨可然任國政府ニ通シラレ度シ

(欄外註記)

四月九日総理大臣閣了

四月十日海軍大臣ヲ經テ裁可済、宮内大臣、内大臣同意

八五 四月十一日 在英国珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

英国ノ特派派遣ニ異存無キ旨ノ我回答ヲ英国  
外相ニ伝達シ又外相ヨリ特派随員ノ人選ニ関  
シ談話ノ件

第三〇五号

四月十一日「バルフォア」氏ニ会见貴電第一八八号ノ次第程能ク申入レタルニ同大臣ハ往電第二九二号戦場ノ經驗アル將軍トハ General Pakeney ノコトニテ又政治家ノ方ハ自分ノ考ニテハ「ソースベリー」侯爵ヲ以テシタク未タ本人ニハ交渉シアラス從テ其ノ諾否ノ程モ予測シ難キモ同侯ナラハ嘗テハ内閣大臣タリシコトモアリ其ノ閱歴地位共ニ適任ト思考シ居レリト述ヘ尚右政治家派遣ニ付テハ英国政府ニ於テ何等特定ノ使命ヲ授クル次第ニアラス「グリーン」大使モ本國ヲ去リテ既ニ年久シク自然当方面ノ事情ニ遠ザカリ居ルコトニ有之此ノ場合右様ノ政治家派遣ハ事情疏通ニ資スル所モ大ナルヘク又「ブルトナー」將軍ハ二月末迄ハ現ニ仏國戦場ニテ一軍ヲ指揮セシ人ニテ戦局ノ実況ニ通シ居ルヲ以テ之ヲ一行ニ加ヘントスルモノニ有之要スルニ右文武ノ老功者派遣ハ一ニ日英相互ノ事情了解ト兩國ノ親善表彰ノ趣旨ニ外ナラス是レ以外何等特定ノ意味ナキコトハ玆ニ重ネテ言明スルニ付篤ト帝國政府ヘ達シ置カレタシト附言シ又独語ノ体ニテ日本政府ニテハ政治家派遣ニハ異議ハ有セラレサルモ別ニ希望ト云フ程ニハアラサルモノノ如シトテ或ハ「グリーン」大使ヨリ右様ノ報告ニ接シ

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

居ルコトカト感セラレタルニ付本使ハ政府来電ニ異議ナシトハ本件ニ付過日来御話ノ顛末詳細政府ヘ電報ノ結果政府ニ於テモ別箇ノ特派使節トシテナラハ曩ニ本使ヨリ私見ヲ披瀝シ置キタル如キ事情モアレトモ「コンノート」殿下ノ随員トシテノ仕組ナラハ右事情ニ基ク異議ノ理由ハ消滅スル訳ナリトノ意味ヲ述ヘタル迄ニテ事柄自身ニ対シテハ日英親善助長ニ多大ノ効益アルモノトシテ我政府モ衷心ヨリ歡迎スルモノタルハ勿論ノ儀ト信スル旨ヲ述ヘ置キタリ

八六 四月十六日 在本邦英国大使館ヨリ  
日本外務省宛

元帥杖捧呈ノ英国特派使節一行ノ主要人名及  
出発ノ日取通報ノ件

MEMORANDUM.

The Special Mission to present the Field Marshal's Baton to the Emperor of Japan will consist of H.R.H. Prince Arthur of Connaught; H.R.H.'s Equerry the Master of Sinclair; Lieutenant General Sir William Pakeney with his Aide-de-Camp the Earl of Pembroke and Montgomery, also probably a civilian Gentleman of importance. H.M.G. may even-

八六

一三七

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

ually decide to attach one or two more members to the Mission.

The Mission will start for Japan before the middle of May, travelling via Canada. H.M.G. are anxious to know how long it should remain in Japan.

British Embassy,

Tokyo.

April 16, 1918.

八七 四月十八日

在英國珍田大使ヨリ  
本野外務大臣宛(電報)

コンノート親王殿下一行出発日取及道筋ニ関

スル件

第三一六号

往電第三〇五号ニ関シ一行五月中旬初メ出発ノ予定ナル旨外務大臣ヨリ内報アリタル処右ハ沙汰止ミト成リタル「パジエツト」一行ノ日取ヲ其儘ニ採用シタルニアザルヤノ懸念アリ依テ外務省係官ニ問合セタルニ全ク其ノ通りニシテ若シ我皇室ニ於テ「アーサー」親王迎接ノ為他ノ日取御望ナラハ帝國政府ヨリ在本邦英國大使ニ申入アルヘシト思フトノコトナリ一行ハ可成軍艦ニテ加奈陀ニ渡リ(英海軍

議ノ上何分ノ儀御回報相成度此段申進候也

八九 四月二十日

本野外務大臣ヨリ  
波多野宮内大臣宛

コンノート親王殿下一行出発日取及道筋ニ関

スル件

人送第五三号

本月十九日附人送第四六号ヲ以テ申進置候英國プリンス、アーサー、オブ、コンノート殿下一行来航ノ件ニ関聯シ在英珍田大使ヨリ別紙写ノ通電報有之候間委細ハ右ニテ御承知相成度此段申進候也

註 別紙ハ前出珍田大使来電第三一六号ヲパラフレーズセルモノナリ省略ス

九〇 五月一日

在英國珍田大使ヨリ  
後藤外務大臣宛(電報)

コンノート親王殿下ノ隨員ニ関シ報告ノ件

第三三七号 極秘

往電第三一六号ニ関シ隨員ハ御附武官陸軍大尉 The Honourable A. J. M. St. Clair, Master of Sinclair (Baron Sinclair ノ嫡子) 陸軍中將 Sir William Pulteney 中將副

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

八七 八八

一三八

省ニ照会中)五日間「モントリオル」ニ滞在晚香坡ヨリ多分「エンプレス、オブ、ロシア」ニテ出発ノ積リナリ

八八 四月十九日

本野外務大臣ヨリ  
波多野宮内大臣宛

英國元帥杖捧呈ノ使節変更及本邦滞在期間ニ

関スル件

人送第四六号

客月十一日附人送第二四号ヲ以テ英國元帥杖捧呈ノ為同國陸軍大將ライト、オノラブル、サー、アーサー、パジエツト隨員一兩名ヲ従ヘ来朝可致趣及御通知置候処今般同大將一行派遣ノ儀ハ見合ト相成右元帥杖捧呈ノ為プリンス、アーサー、オブ、コンノート殿下同殿下別当 The Master of Sinclair 陸軍中將 Sir William Pulteney 同中將副官 Earl of Pembroke and Montgomery ノ三名及多分其外ニ軍人以外ノ重要ナル人物一名(尚其他一二名ノ隨員ヲ加ヘラルコトアルヤモ不計趣)ヲ隨ヘ加奈陀經由来航ノコトニ決定セラレ来ル五月央頃以前ニ本邦ニ向ケ出発ノ管ニ有之候趣ヲ以テ同殿下一行本邦滞在ハ幾日間位ト相定メ可然哉ニ付在本邦英國大使ヨリ問合ノ次第有之候間至急御詮

官陸軍少佐 Earl of Pembroke and Montgomery 外ニ陸軍大尉 F. Batt 及従卒四名ト確定シタル旨外務省極東部ヨリ内報アリシモ政治家隨員ニ付何等通知ナキニ付五月一日外務大臣ニ面談シタルニ大臣ハ「ソ」侯爵ハ目下當國ヲ去リ難キ事情アリ他ノ適當ト思ハルモノモ皆同様ナレハ政治家派遣見合案ヲ軍事内閣ニ提出シタルニ依リ未タ決定セス併シ右派遣到底不可能ニ付該案至急決定方取計フヘシト語レリ

九一 五月三日

後藤外務大臣ヨリ  
波多野宮内大臣宛

コンノート親王殿下隨員ニ関スル在英國珍田

大使電報写送付ノ件

人機密送第五号

英國アーサー親王殿下隨員ノ件ニ関シ在英珍田大使ヨリ別紙写ノ通電報有之候間此段及御通知候也

註 別紙ハ前出珍田大使来電第三三七号ヲパラフレーズセルモノナリ省略ス

九二 五月五日

在本邦英國大使館ヨリ  
日本外務省宛

八九 九〇 九一

一三九

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

アーサー、オブ、コンノート親王殿下御來朝

ニ關スル經過ノ件

九二

一四〇

*of a political element, besides adding "to the éclat of the Mission might be of real value to "the Anglo-Japanese Alliance". I was asked for my views.*

I replied that the fact that His Majesty The King had decided to despatch a Royal Prince under existing War conditions must appeal to everyone, and that the presence of the Prince must make the Mission "*a certain success and be highly appreciated by the Japanese Government and people*". As regards the political element which it was proposed to attach to the Mission, I ventured, speaking personally, to deprecate it in war time as liable to possible misunderstanding. I added however that if it should be decided to send a personage, say a Peer of distinction, "*he would find a warmer welcome and arouse less suspicion if he made it clear that his rôle was one of courtesy rather than of business*".

A fortnight later I was informed by Mr Balfour that the Mission would be despatched early in May, and that it would be headed by Prince Arthur of Connaught, who would be accompanied by General Sir W. Pulteney and Aides de Camp. Mr Balfour

On March 7th I informed the Ministry for Foreign Affairs that General Sir Arthur Paget would be despatched by His Majesty The King to Japan on a Special Mission in order to deliver the Bâton of a British Field Marshal to His Majesty The Emperor. I at the same time stated, by direction of my Government, that a Field Marshal should have been entrusted with the Mission had it been possible to detach an officer of that rank under existing war conditions.

A fortnight later I was informed by Mr Balfour that the War Cabinet had decided to increase the importance of the Mission, and that it was "*proposed to send a Royal Prince as Head of the Mission*." I was further informed that "*the suggestion had been made to attach to him (the "Prince") a personage of political importance probably a "Peer of distinction*". It was thought, Mr Balfour said, that "*the addition*

further stated that probably an important civilian would be attached to the Mission "*as the Japanese Ambassador had informed me (Mr Balfour) that his Government would welcome the association of such a personage with the Military Mission*".

British Embassy,

TOKYO.

May 5th, 1918.

(欄外註記)

五月六日在本邦英國大使持參

Memorandum.

Private

From the above it appears evident

(1). that the Mission was originally a special Military Mission pure and simple.

(2). that the War Cabinet, being unable to find a Field Marshal under present war conditions, decided to increase the importance of the Mission by advising His Majesty The King to send a Royal Prince to head it.

(3). That it was further proposed, as an after-thought, to attach to the Prince a civilian personage

of political importance in order to add to the éclat of the Mission, and enhance the value of the Alliance between the two countries.

(4). That this proposal was made on the assurance of Viscount Chinda that the Imperial Government would welcome the association of such a personage with the Mission.

(5). That the Mission is a Royal Mission to present a Field Marshal's Bâton to The Emperor of Japan, whether a civilian be added to it or not; and that, in sending a Royal Prince to encounter the risks of war-time conditions when travelling on sea and land, His Majesty The King is giving the highest mark of his friendship and devotion towards the Emperor and People of his Ally Japan.

(欄外註記)

之ハ英國大使一己ノ推測ヲ述ハタルモノニシテ不正確ノ点少カラス殊ニ四及四ノ如キハ全ク誤解ニ基クモノナリ此等ノ点ハ五月六日幣原ヨリ同大使ニ口頭ヲ以テ詳細指摘シ置ケリ同大使ニ於テモ此覚書ハ同大使ノ接シタル電報中ヨリ推斷セラルルハ止マルカ故ニ單ニ幣原限リノ参考迄ニ含シ置カントスベシ

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

(右和訳文)

(註 仮訳文ナリ、尚 Private トシアル覚書ヲ含マズ)

英國皇族プリンス、アーサー、オブ、コンノート殿下御来朝  
ニ関スル経過覚書

(五月六日在本邦英國大使館原次官へ持参)

三月七日日本使ハ英國元帥杖ヲ日本国皇帝陛下ニ捧呈セシメ  
ラレンカ為英國皇帝陛下ハ「サー、アーサー、パデエツ  
ト」大將ヲ特使トシテ日本国ニ差遣セラルヘキ旨ヲ日本外  
務省ニ通知シ同時ニ本国政府ノ訓令ニ基キ若シ戦況之ヲ許  
シタラムニハ元帥ノ一人ヲ簡派シテ此任務ヲ負ハシムルコ  
トト為ス筈ナリシ旨ヲ附言シタリ

其後二週間ニシテ英國外務大臣「バルフォア」氏ヨリ英國  
戦時内閣ニ於テハ此特使差遣ヲ一層重要ノモノト為スコト  
ニ決シ特使首席トシテ皇族一名ヲ差遣シ右皇族ニハ政界ノ  
有力者(多分知名ノ貴族)一名ヲ随行セシムトノ議起レ  
ル旨並ニ斯克政治的要素ヲ加味スルハ本使節ノ威容ヲ隆ニ  
スルノミナラス實際日英同盟ニ資スル処少カラサルヘシト  
思考セラルル旨ヲ通報シ之ニ関スル本使ノ意見ヲ求メ来レ  
リ

本使ハ現下ノ戦局ニ際シ英國皇帝陛下カ皇族ヲ差遣セムコ  
トヲ御決裁相成タル儀ハ必スヤ一般ノ賛歎ヲ博スヘク又皇

英國アーサー親王殿下随員ニ関スル件

人機密送第七号

本月三日附人機密送第五号ヲ以テ写及御送付置候在英珍田  
大使電報末段ノ件ニ関シ随員ニ加ハルヘキ軍人以外ノ重要  
ナル人物ハ此際到底人選都合付カサルニ付純然タル軍人随  
員ノミヲ以テ特使一行ヲ組織スルコトトナリタル旨英國外  
務大臣ヨリ確答アリタル趣同大使ヨリ電報有之候間右様御  
了承相成度此段申進候也

九四

七月一日

後藤外務大臣  
在本邦英國大使 会談

アーサー親王殿下御来朝ニ関スル件

大正七年七月一日別用ヲ以テ来談ノ節英國大使ハ英國皇族  
殿下無事御退京ニ関スル外務大臣ノ祝意挨拶ニ対シ日本官  
民ノ熱誠嚴肅ナル歡迎ニツキ謝意ヲ述べ且殿下ニハ寺内総  
理大臣トノ御会談ヲ深く満足ニ思召サレ其趣旨大要ハ大使  
ニ御示アリタルニ付早速本国政府ヘ電報シ置ケリトノコト  
ヲ外務大臣ニ告ケ尚外務大臣ヨリモ殿下御来航ニ関スル何  
等感想ヲ承知シタシトノコトニテ外務大臣ハ英國皇帝カ軍  
国多事ノ際ニモ拘ラス殿下ヲ特派セラレタルノ一事ハ勿論

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

九三

一四二

族ノ御渡航アル以上本使節ノ成效疑ナク日本官民ニ於テ深  
ク感銘スヘキ旨ヲ答ヘ唯政治的要素ヲ本使節一行ニ加ヘム  
トノ儀ニ就テハ本使一己ノ私見トシテ戦時ノコトニモアリ  
誤解ヲ惹起スルノ虞アルヲ以テ之ヲ差控ユル方然ルヘシ去  
レトモ若シ一有力者例ヘハ知名ノ貴族一名ヲ随行セシムル  
コトニ決定セラルル様ノ場合ニハ特ニ其任務ノ実務ニ在ラ  
ス札讓ニ存スルコトヲ明ニスル方驩迎ヲ受クルコト厚ク嫌  
疑ヲ招クコト少キ結果トナルヘキ旨ヲ附言シ置ケリ  
爾後二週日ニシテ「バルフォア」氏ヨリ本使節ガ五月上旬  
発程スヘキ旨使節首席ハ「アーサー、オブ、コンノート」  
親王ニシテ「サー、ダヴリユ、バルトニー」大將及副官  
(複數)随行スヘキ旨並ニ曩ニ在英日本国大使ヨリ本軍事  
的使節ニ更ニ有力ナル文官一名ヲ加ヘラルルハ日本国政府  
ノ喜フトコロナルヘキ旨談話アリタルニ付多分左様取運フ  
コトトナルヘキ旨通知シ来レリ

千九百十八年五月五日

在東京英國大使館ニ於テ

九三

五月七日

後藤外務大臣ヨリ  
波多野宮内大臣宛

殿下御来航カ今次御来朝ニテ三回ニ及ヒ日本国民上下トモ  
ニ恐多キコト乍ラ特ニ親愛ノ念ヲ以テ殿下ヲ仰瞻スルアリ  
一般ノ自由ニ任セ置キタリシナランニハ御歡迎ノ表彰ハ更  
ニ熱烈盛大ナリシモノアリタランカ其辺ハ時局柄諒恕セラ  
レタク殿下御来朝ニヨリ日英兩國ノ親交ニ更ニ一段ノ密邇  
ヲ加ヘタルハ同慶ノ至ナリト述ヘラレ大使ハ右ニ對シ謝意  
ヲ表シタリ

因云

六月二十四日殿下歡迎外務大臣晚餐会ニ際シ外務大臣ヨ  
リ御挨拶申上ケタルニ對スル殿下ノ御答詞中「懇親ナル  
モノノ間ニハ往々爭論ヲ生スルコトアリ之レ即チ兩者ノ  
親交ニ遠慮ナキカ為ニシテ其爭論モ若干ナク雲散霧消シ  
更ニ益々昵懇ノ間柄ヲ濃カナラシムルモノナリ日英兩國  
ノ敦睦關係亦然リ」トノ部分ハ晚餐後御退去ニ際シ重ネ  
テ通訳者ニ對シ右ノコトハ熱ト外務大臣ノ心裡ニ印象ス  
ル様通訳シ置クヘシトノ敕命アリタリ察スルニ右ハ突嗟  
ノ間ノ御措辭ニハアラサリシモノノ如シ  
殿下御滞在中外務大臣ハ隨員ボルトニー將軍ノ來訪ヲ求  
メ談笑一時間ニ亘リタルコトアリタルカ同將軍ハ軍人ノ

九四

一四三

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

コトトテ特ニ政治上談スヘキコトトテハ無之モ英国ニ於テ在日本外務並陸軍官憲ヨリノ報告ニテ日本ニ於テハ実業家間ニ日英同盟ニツキ面白カラサル感想ヲ抱クモノアルヲ承知セルカ何故ニ然ルヤ右実業家トハ如何ナル種類ノ人士ナリヤトノ質問ニ大臣ヨリ相当説明アリタルカ將軍ノ駐在セル南阿地方ニ関シテモ同様ノ非難アリタリトテ首肯シタリ

右殿下並隨員ノ我邦ニ対スル感想ヲ知ルノ一端トシテ附記ス

九五 七月一日 在英国珍田大使ヨリ  
後藤外務大臣宛(電報)

アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日ト

日英同盟關係ニ関スルタイムズ紙ノ論評報告

ノ件

附記 六月十八日附やまと新聞掲載

アーサー親王殿下歓迎ノ辭

第五〇四号

本邦ニ於ケル「アーサー」殿下歓迎振リハ隨時ノ新聞所報ニ依リ当国一般ニ良好ノ印象ヲ与ヘ居ル処七月一日ノ「タ

九五

一四四

イムス」ハ六月二十五日発同紙東京特派員ノ殿下トノ会谈記事ヲ掲載シ之ト六月二十九日「セツフィールド」大学ニ於ケル名誉学位授与式ニ於ケル本使ノ演説ヲ援用シ日英關係ニ付大要左ノ論評ヲナセリ

別項所載我東京特電ヲ見ルニ「アーサー」殿下ハ赫々タル使命ノ御成功殊ニ隨所ニ溢レタル民衆的歡迎振リニ対シテ痛ク御感動遊ハサレ居ラルル事明瞭ナリ殿下ノ御満足ト御喜悅ハ軼テ英帝國ヲ通シ普ク共鳴セラルヘキハ論無シ日英同盟ハ常ニ英国民ノ一方ナラサル好評且是認ヲ博シ来レルカ本同盟ノ人氣ハ政治家及(脱)判断ノミナラス実ニ一般民衆ノ感情ニ立脚スルモノナリ「セツフィールド」大学ニ於テ日本大使ノ演説セル如ク同盟成リテ既ニ茲ニ十六年本同盟ハ今尚永続長命ノ吉兆ヲ示シツツアリ珍田子爵ハ日英關係ノイトモ強固親善ナル適証トシテ「アーサー」殿下ノ使命及歡迎ニ言及セラレタルカ殿下御自身ノ言ニ徴スルモ大使所言ノ真ヲ得タルヲ見ルニ足ル殿下ハ日本ノ総テノ階級ハ日英同盟ノ相互ニ与フル利益ヲ認識シ之ヲ以テ極東平和ノ保障トナシ日英同盟ハ両国關係ノ眼目ニシテ両国親善ノ為メニハ凡テノ手段ヲ講スヘキコトヲ希望シ居ル旨ヲ仰

一、デイフエレント、エフォーツ)ヲナスヘシトノ信念ヲ表明シ居レリ云々

(附記)

六月十八日附やまと新聞掲載

コンノート殿下を迎へ奉る

一

貴賓玉杖を携へて帝都に入る。車駕親臨、儀礼の美を整へて之を迎へさせられ、上下官民挙つて皇室の珍客に誠意を表す。九重の彼方、深緑風に薫りて鸞鳳も空に舞ふべしコンノート殿下の我国に渡来せらるること茲に三たび、その偉名と盛徳とは既に遍く日本国民の憧憬する所。颯爽たる御風姿の彌々氣高きを瞻ぎて先づ祝賀の声を揚ぐ

二

皇室と皇室との敦厚なる御交誼は申すも畏し。這次コンノート殿下が歐洲大戦乱の最中に就て、重要な軍国の機務に膺らせらるるの身を以て、滄溟万里の險を冒し遙に我國に使ひし給へること、洵に史上異数の特例なり。我國民は英皇室の熱切なる好意に對し感激以て益々衷心の誠悃を捧げんとす

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

九五

一四五



言ふ迄もなく、日英兩國は血を啜つて、死生を盟へる間柄なり、特にコンノート殿下は最も我國民に親しくいそしみ給へる無二の貴賓に在せり、故に陳腐なる形式的辭令を布きて殿下を奉迎するは寧ろ余りに素々しく余りに他人行儀に過ぐ。希はくは吾人をして何等飾りなく偽りなきの真情を述べて殿下の旅情を慰め併せて殿下の明鑑を請はしめよ

惟ふに日英同盟は今や單なる外交上の權威たるに止まらずして世界に類なき精神的尊貴を帯びつつあり、少くとも日本國民は一切の利害觀念を超脱し極めて切烈にして且深奥なる道義的熱情を日英同盟に傾注し以て未来永劫絶えて變るなきを確信す。そは既に日本國民に取りての宗教的信条となり神聖なる歴史的伝統を形作り。これ我七千万民の胸より胸を貫ける靈活なる對世界的中樞思想にして素より如何なる内閣、如何なる政党、其の他如何なる勢力家と雖も之に逆ひ之を破る能はず。況や区々たる政略的言説の如きをや。この一事、吾人はコンノート殿下高邁の識見に依て如実に大英國國民に徹底せしめられんことを翹望す

## 三

旧時は措て問はず、そもそも歐洲の中原に意外なる大動

利を計るの心ありとせんか、寧ろ或は厳正中立の地位に立ち専ら商權の拡張に従ふを可とすべく又或は此機會に於て縱横變幻の機略を弄する必ずしも難きにあらず。唯夫れ信義を尊重すること生命よりも強き日本國民は断じて之を為さず。否、与国の難に馳せて信義に殉ずるは日本國民の快とする所、蓋し二千年來固有の國民性然るなり

## 四

吾人をして更に率直に語らしめよ何れの國家にも一部少数の人士が往往時代思潮に逆行し時の政策に反対するものあるは免れ能はず。是れ例へば英國々内にも親独主義の議論を唱へ徴兵令施行にも不服を訴ふるものなきを保せざるが如し。されど日本國民は七千万の全部を挙げて未だ一人の日英同盟排斥者あるを聞かず、偶々日英同盟に關し異論を主張するものありとするも、そは決して同盟を排斥するにあらずして實は即ち同盟改善論を唱ふるに過ぎず。而して其の之を唱ふる理由は常に却て英國側の疑惑又は誤解に刺戟さるる場合多きに居るを見通すべからず。特に在支英人の間に於て屢々自己の利益上より日本の政策に對し種々の言を放つものあるが如きは其著しき一例也、又戦前に於

乱の勃発してより以來、日本國民が日英同盟の為に努力したる多くの事實は昭々として天下億兆の齊しく認識する所。青島を攻略して敵國の策源地を掃蕩せるを始めとし、尋では南洋に艦隊を遣りて独艦の跳梁を挫き、以て印度及濠洲一円の平和を確保し爾來蘇士以東ハ勿論、漸次其警備網を拡大して世界海面の大半を支持し、更に進んでは地中海にまでも協同作戰の任務を執るに至り、且他方に於ては露國其他の連合与國に物資を供給するに努め、而も此間未だ曾て秋毫の報償を求めたることなく、一点の私心を挟みたるなきなり。此の如き顕著なる犠牲的貢獻を眼前にして若し日英兩國の關係を疑ふものあらば、これ疑ひもなく事實を正視する能はざる盲目者のみ

元來日英同盟の根本義は東洋の平和を保持すること、を以て其目的とす。故に歐洲戰爭の予想し能はざりしが如く、該同盟を推拡して独禍を除くが為に上記の大任務を執らざるべからずとの予想は曾て何人の胸裡にも往來せざりしなり。而も日本國民は踴躍して世界一半の秩序負担者となれり。そは即ち日英同盟に忠実ならんと欲する崇高なる道義的觀念に燃燒されたる結果に外ならず。若し事變に乗じて

ける濠洲及加奈陀人の排日論の如き、或は又印度に於ける日本人の經濟的發展に不利なる施設に遭遇せる場合の如き、何れも日英同盟改善論の動機を与ふるに至れる実例ならざるなし。換言せば日本國民の日英同盟に對する各種の論議は総て英帝國治下の一部人士より与へられたる反響の産物たり。日本國民の聲にあらずして他より受けたる激動の余波なり

## 五

凡そ國際關係上に於て最も憂慮すべき事象は敵國民の離間中傷と不快なる疑惑及誤解とより生ずる意思の阻隔なり。そは概ね事實を正視せず又は問題の真相を理解せざるの過誤に基因し、或は自ら描きたる幻影を捉へて風なきに雲を喚ばんとする政略より胚胎す。若し日英兩國間に不祥の陰翳の起るありとせば、畢竟前記數種の場合に限らる。吾人は英米人の或者より日本の對支政策に關し屢々疑惑を受け又對印度關係の将来に就て吾人の夢想だもせざる臆測を聞けり、最近米人が日独同盟云々の説を流布し、或は西伯利亞問題に關して日本の心術を揣摩付度するものあるが如き、皆疑心暗鬼の類にあらずんば自己の投影に映ゆるの

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

謬見に過ぎず。齊しく、独逸を敵とし、協同、籌画互に、最善を尽し、つつある日英米等の間に於て何の禍心、何の誤解、あらん。日本は現に支那及印度の秩序を保持し更に遠く南洋及地中海に迄も出動し、つつあるにあらずや。請ふ明かに記せよ、日本帝国は日英同盟を厳守し尊重する事に於て些の不安をも与へたる例ありや。仮に我帝国民にして独人の如き思想を有すとせよ、独逸が露国を攪乱せるが如き手段を隣邦支那に用ひること極めて易易たるのみならず、更に印度に魔手を伸ばし濠洲に羽翼を張り東露に侵略の歩を進むべく何等の困難をも感ぜざるべし、こは独逸を敵として与国の為に努力するよりも寧ろ或は容易の業也、而も公明正大信義を旨とする日本国民は断じて此の如き機略を執るを欲せず終始一貫、与国の為に淬励し、つつある也。吾人は動もすれば支那、印度又は東露の形勢に関し日本の態度を疑はんとする論者が日本の忠実なる努力を無視して如何に東洋及南洋の平和を支持し得るかを反問せざるを得ず。

六

聰明なるコンノート殿下の入京を迎ふるに際し上来吾人の説く所或は非礼の咎めを受けんを恐る。これ併しながら

四 六月十九日天皇陛下ヨリ英國皇帝陛下宛御礼電亨

五 六月二十日英國皇帝陛下ヨリ天皇陛下宛御答電亨

六 アーサー、オブ、コンノート殿下隨員受勲名簿

七 アーサー、オブ、コンノート殿下從者受勲名簿

人機密送第七号

今般 天皇陛下へ英國皇帝陛下ヨリ御贈進ノ陸軍元帥杖捧呈ノ為御來航ノ英國皇族アーサー、オブ、コンノート殿下ニ対シ我皇室ニ於テハ帝室ノ貴賓トシテ待遇セラルルコトニ決定シ霞閣離宮ヲ以テ同殿下御一行ノ旅館ニ充テ且川村元帥外七名ノ接伴員ヲモ任命セラレ朝野共ニ殿下ノ御來着ヲ待チ居タルカ殿下ニハ客月十八日朝春洋丸ニテ横浜港ニ御安着同地ヨリ特別列車ニテ同日午前十一時三十分東京駅へ御着我 天皇陛下ノ御出迎ヲ受ケ直ニ御旅館霞閣離宮ニ入ラセラレ候此日殿下ノ隨員陸軍中將ポルトニール外四名へ別紙a号名簿ノ通勲章下賜セラレタリ其翌十九日午前十時五十分殿下ハ隨員一同ヲ随へ御参内 天皇陛下ニ御対面元帥杖並辭令書及英國皇帝陛下ノ御親翰（別紙甲号

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

九六

野人文辭に嫻はざるの罪なり、吾人の真意は日英同盟の千載に渝りなきを熱望し切言せんと欲するの余、両国間に一抹の雲翳をも發生すべき理由なきを論明せるのみ。吾人は繰返していふ、我七千万国民中には一人たりとも日英同盟に對して二心を藏するものなし、若し之に對して異論を唱ふるものありとせば、そは兩國の關係を一層堅実鞏固ならしむるを目的とする同盟改善論たり而して其動機原因は総て英帝国治下の排日論より生ぜる反響に外ならざること、這次使節の一行に依て英本国に伝へられんを望む

九六 七月二十五日

後藤外務大臣ヨリ  
在英國珍田大使宛

アーサー、オブ、コンノート親王殿下英國陸軍元帥杖捧呈其他二閣シ通報ノ件

附屬書一 四月十七日附英國皇帝陛下ヨリ天皇陛下宛御親翰亨

下宛御親翰亨

二 六月十九日コンノート殿下ノ言上振写和訳文

三 六月十九日天皇陛下御答辭亨

写）ヲ捧呈セラレタルガ 天皇陛下ハ正殿ニ出御正式ニ

且最莊嚴ナル儀式ヲ以テ之ヲ受ケサセラレ候其際殿下ノ言上振ハ別紙乙号写ノ通ニシテ之ニ對サセラルル 天皇陛下ノ御答辭ハ別紙丙号写ノ通ニ有之候尚此日 天皇陛下ヨリ英國皇帝陛下へ御謝電ヲ發セラレ之ニ對シ英國皇帝陛下ヨリ御答電アリ其電文ハ別紙丁号戊号写ノ通ニ有之候而シテ同日午後御答訪トシテ 天皇陛下霞閣離宮へ行幸被

為在又殿下ニハ同日夜御参内 天皇皇后兩陛下へ御対面尋テ晚餐ノ御会食アリタリ其翌二十日殿下ノ從者四名へ別紙b号名簿ノ通勲章下賜セラレ候越エテ六月二十五日ハ皇后陛下ノ御誕辰ニ付殿下ハ祝賀ノ為同日午前御参内

天皇皇后兩陛下ニ御対面相成タリ而シテ六月二十八日殿下ハ御告別ノ為御参内 天皇皇后兩陛下ニ御対面尋テ午餐ノ御会食アリ同日午後ニハ殿下ヲ御訪問ノ為 天皇陛下霞閣離宮へ行幸御告別ノ際綴錦菊模様屏風一枚及詩繪文

台巻組ヲ 天皇親ラ殿下ニ御贈進被為在其翌二十九日夜殿下ニハ御退京御微行ニテ関西地方へ向ケ御旅行京都ニ御滞在畿内地方御見物ノ上本月十日午前吳港沖ニ於テ帝國軍艦霧島ニ御搭乘ヴィクトリアニ向ケ御帰國ノ途ニ就カセラ

九六

レ候而シテ今回我皇室ノ御待遇振ハ在来外国皇族来朝ノ場合ト異リ極メテ御親密ナル御取扱ト見受ケラレ殊ニ六月十九日晚餐及六月二十八日午餐御会食ノ際ノ如キハ 天皇陛下ニハ殿下ト頗ル親密ナル御会談被為在候将又今回英国皇帝陛下カ軍国多事ノ日海上ノ戦時危険ニモ拘ラス其ノ至近ノ懿親コンノート殿下ヲ御派遣遊ハサレタル盛意ニ対シテハ上下均シク感銘スル所ニシテ御滞京中ハ勿論近畿御旅行中モ御警衛ニ関シテハ時節柄特ニ留意シ尚七月七日以降ノ御動静ニ付テハ極秘ノ扱ヲシテ新聞紙等ノ記載モ絶対ニ禁止シタル次第ニ有之候右貴官御心得迄ニ及御通報候也

(附屬書一)

甲号写

四月十七日附英国皇帝陛下ヨリ天皇陛下宛御親翰

Sir My Brother,

Being desirous of offering to Your Imperial Majesty a testimony of the warm gratification which has been afforded to Myself and My People by Your acceptance of the honorary rank of British Field Marshal, I have made choice of My beloved Cousin His Royal Highness Prince Arthur Frederick Patrick Albert of Connaught, Knight of My Most Noble

Order of the Garter, whom I selected in 1912 to invest Your Imperial Majesty in My name with the Ensigns of that high Order, to proceed to Your Court in order to deliver to Your Imperial Majesty the baton which is the emblem of a Field Marshal's rank, and also My Royal Letters Patent conferring that rank upon Your Imperial Majesty.

I trust that You will receive with pleasure at the hands of His Royal Highness these symbols of My high appreciation of the closeness of the relations between Our Allied Empires, which relations I feel persuaded cannot but have derived still further strength and cordiality from Your Imperial Majesty's readiness to do honour, by graciously accepting the highest rank in the British Army, to My gallant troops now engaged in this terrible struggle for the liberties which are so dear to Our respective Peoples.

I ask that Your Imperial Majesty will give entire credence to all that I have charged His Royal Highness to communicate to You on My behalf, more especially when he shall express to Your Imperial Majesty the assurances of the invariable friendship

and highest esteem with which I am,   
mann regia.

Sir My Brother,

Your Imperial Majesty's

Good Brother,

GEORGE R. I.

Buckingham Palace,

April 17th, 1918.

My Good Brother

The Emperor of Japan.

(附屬書二)

乙号写

六月十九日アーサー、オブ、コンノート殿下ノ言上振写

I have it in Command from The King Emperor, my august Master and Royal Cousin, to ask Your Imperial Majesty graciously to receive the Bâton of a Field Marshal in the British Army which I am empowered to deliver into Your Imperial Hand.

In accepting the rank of Field Marshal Your Imperial Majesty has conferred the highest honour on the British Army which is proud to be associated with the mighty Army of Japan whose glorious tradi-

tions of self sacrifice and ardent patriotism have evoked the admiration of the world.

By Your gracious acceptance of the insignia of the highest military dignity in His Britannic Majesty's Army, Your Imperial Majesty will not only exalt the spirit of comradeship which animates the Japanese and British soldiers in their common efforts to uphold the cause of freedom and right, but will give a further proof of the strength of the indissoluble bonds of alliance and friendship which unite the two nations.

His Majesty King George trusts, Sire, that You will regard His Royal Commission constituting and appointing Your Majesty to be a British Field Marshal as a signal mark of His unalterable friendship and esteem and He feels that on no Sovereign could the emblem of the highest Military Rank in His Army be more fittingly bestowed.

(甲号振写) (附屬書三)

謝上

「アーサー」ハ「アーサー」ノ主君ニシテ皇從臣タシ「ミュージ」皇帝ヨリ英国軍隊ノ元帥杖ヲ陛下ニ捧呈シ陛下ニ

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

嘉納ヲ請フヘキ叡旨ヲ蒙リタリ  
陛下ハ曩ニ英国元帥ノ班位ニ列スルヲ諾受セラレ以テ忠勇  
義烈中外ノ賞讃ヲ博シタル偉大ナル日本軍隊ト相協同スル  
ヲ誇トスル英国軍隊ニ対シ至高ノ名譽ヲ附与セラレタリ  
陛下カ英国軍隊ノ最高栄班ノ徵象ヲ嘉納セラルルハ即チ自  
由正義ノ擁護ノ為相協戮スル日英兩國軍隊ノ士氣ヲ鼓舞ス  
ルノミナラス亦以テ日英兩國ヲ結合スル同盟友厚ノ不渝ノ  
関繫ヲ更ニ表彰スル所以ノモノナリ  
「ジョージ」皇帝陛下ハ日本皇帝陛下カ玆ニ英国元帥ノ班  
位ヲ捧クル本使節ヲ以テ「ジョージ」陛下ノ不変ノ友誼尊  
敬ノ特証トセラルヘキコトヲ期シ英国軍隊ノ最高班位ノ表  
象ヲ贈進スルニ適スルコト陛下ノ右ニ出ツル君主之無キヲ  
信シ給ヘリ

(附屬書三)

丙号写

六月十九日天皇陛下御答辭

朕ハ玆ニ三度殿下ヲ当国ニ迎ヘ欣悦ニ堪ヘス殿下ノ来訪ハ  
毎ニ朕ノ衷心ヨリ歡迎スル所ナリ  
朕ノ盟友ジョージ皇帝陛下ノ軍隊カ不撓不屈毅然トシテ帝

appreciatively value.

I receive this Baton at Your Royal Highness's  
hands, with the sincerest pleasure, and I request  
you to convey to His Majesty the King My thanks  
for the gift, and for the exalted mode of its trans-  
mission, together with the assurance of the senti-  
ments of attachment which animate Me towards Him,  
as well as of My constant wishes for His majesty's  
health and prosperity.

(附屬書四)

丁号写

六月十九日天皇陛下ヨリ英国皇帝陛下宛御礼電

陛下ハ曩ニ朕ヲ貴国元帥ノ班位ニ列セラレ今回又元帥杖ヲ  
朕ニ贈ラルルカ為特ニ「アーサー、オブ、コンノート」殿  
下ヲ簡派セラレタルハ感謝ニ堪ヘサル所ナリ朕ハ玆ニ陛下  
ノ厚意友情ノ此貴重ナル徵証ニ対シ朕ノ深厚ナル謝意ヲ表  
スルト同時ニ殿下ノ恙ナク来著セラレタルヲ祝ス

大正七年六月十九日

英国皇帝陛下

御名

(右英文)

五 英国皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

九六

一五二

ニ敵ノ猛襲ヲ撃退スルハ世ノ嘆称スル所ナリ今陛下カ朕ヲ  
此驍勇無比ナル軍隊ノ最高班位ニ列セラレタルハ即チ陛下  
ノ朕ニ対シテ抱持セラルル友誼ノ深厚ナルコトヲ表彰スル  
所以ニシテ朕ノ寔ニ感荷ニ堪ヘサル所ナリ

朕今玆ニ親シク殿下ヨリ元帥杖ヲ受納ス欣快曷ソ勝ヘン冀  
クハ此光榮アル寄贈并之カ為特ニ殿下ヲ派遣セラレタル陛  
下ノ盛意ニ対スル朕ノ感謝ト朕カ陛下ヲ敬慕スル思念ト陛  
下ノ康寧隆昌ニ対スル朕ノ懇禱トヲ陛下ニ伝ヘラレムコト  
ヲ

(右英文)

Your Royal Highness:—

It is with cordial pleasure that I greet you on  
your arrival for the third time in Japan. The occa-  
sion of Your Royal Highness's welcome visit affords  
Me a very high degree of gratification. His Majesty  
King George, My August Ally, may indeed be proud  
of His Army, which continues invincibly to hurt back  
the utmost efforts of Our enemies. To be accorded  
the highest rank in such an Army is a mark of His  
Majesty's friendship and regard which I shall ever

His Majesty the King,

London.

I am deeply touched by the cordial sentiments  
which have led Your Majesty graciously to accord  
to Me the rank of a Field-Marshal in the British  
Army and now to specially depute His Royal High-  
ness Prince Arthur of Connaught to hand Me the  
Field-Marshal's Bâton.

I express My sincere thanks for this precious  
token of Your Majesty's friendship and goodwill, and  
I ask Your Majesty to accept My congratulations on  
the safe arrival of His Royal Highness.

YOSHIMITO.

Tokio, 19/6/1918.

(附屬書五)

戊号写

六月二十日英国皇帝陛下ヨリ天皇陛下宛御答電写

His Imperial Majesty the Emperor of Japan,

Tokio.

I heartily thank Your Imperial Majesty for the  
friendly message received to-day. The pleasure in  
granting You the rank of Field Marshal in my Army

九六

一五三

五 英國皇族アーサー、オブ、コンノート親王殿下訪日一件

been handed to You by my cousin Prince Arthur  
is enhanced by the fact that the baton of office has  
whose safe arrival to enjoy again Your kind hospi-  
tality I learnt with much satisfaction.

GEORGE. R. I.

London, 20/6/1918.

(右和訳文)(註仮訳文ナリ)

本日陛下ノ懇篤ナル親電ニ接シ感謝ニ堪ヘス英國陸軍元帥  
ノ班位ヲ陛下ニ贈進シタル朕ノ歡喜ハ朕ノ従弟「プリ  
ンス、アーサー」ヲシテ陛下ニ元帥杖ヲ捧呈セシメタルニ依  
リ一層深厚ナルヲ得タリ又同従弟ノ貴国ニ安著シ重ネテ陛  
下ノ優遇ヲ辱ウスルヲ開クハ朕ノ欣幸トスル所ナリ

ジョージ

日本国皇帝陛下

(附屬書六)

(a号)

アーサー、オブ、コンノート殿下隨員受勲名簿

英國皇族アーサー、オブ、コンノート殿下隨員

勲一等旭日章 陸軍中將サー、ダヴリウ、ポルトニー

旭日中綬章 陸軍中佐勲三等ジェー、エー、シー、サマ

九六

ヴィル

一五四

(在本邦英國大使館付陸軍武官)

勲三等瑞宝章 陸軍少佐アール、オブ、ペンブルック、エ

ンド、モントゴメリー

勲四等旭日章 陸軍大尉オノラブル、エー、ジェー、エム、

シンクレイア

勲四等旭日章 陸軍大尉 エフ、バット

(附屬書七)

(b号)

コンノート殿下從者受勲名簿

英國皇族アーサー、オブ、コンノート殿下從者

青色桐葉章 勲七等ハーリー、アルフレッド、ガーナー

勲七等瑞宝章 レオナルド、テイラー

勲七等瑞宝章 ジョージ、ホグビン

勲七等瑞宝章 エフ、フアーザー

## 事項六 東伏見宮依仁親王殿下英國及他連合國往訪一件

九七 五月二十七日

後藤外務大臣ヨリ  
在英國珍田大使宛(電報)

依仁親王殿下ヲ英國ヘ御派遣ニ付同國皇室ノ

意嚮問合方訓令ノ件

第二七一号

英國皇帝陛下ヘ元帥徽章御贈進ノ為依仁親王殿下ヲ英國ヘ  
御派遣被遊度思召アリ英國皇室ニ於テ同殿下ヲ可被為受哉  
内々其ノ意嚮御問合ノ上結果電報アリタシ  
尚殿下ハ八月中旬頃当地御出発ノ御予定ナリ

九八 六月二十一日

後藤外務大臣ヨリ  
在英國珍田大使宛(電報)

依仁親王殿下御出発ノ日取並コンノート殿下

ノ為軍艦霧島派遣通報ノ件

第三二二号

依仁親王殿下ハ英國皇帝陛下ニ於テ十月第三週以後ノ御着  
英ヲ希望セララル趣在本邦英國大使ヨリ申出アリタルニヨ

六 東伏見宮依仁親王殿下英國及他連合國往訪一件 九七 九八 九九 一〇〇

リ九月二十六日発ノ「シヤトル」行伏見丸ニ搭乘セラレ  
「ヴィクトリア」ニ御上陸C、P、R、線ニテ東行セラル  
ル管尚「コンノート」殿下米国迄御乗用ノ為巡洋戦艦霧島  
ヲ派遣スルコトニ決定セリ

九九 六月二十四日

在英國珍田大使ヨリ  
後藤外務大臣宛(電報)

依仁親王ト天皇陛下トノ御關係ニ関シ問合ア

リタルニ付請訓ノ件

第四六三号 至急

依仁親王ハ陛下ト御親族關係上何ニ当ラセラルルヤ外務当  
局ヨリ内々問合アリ回答振至急御電訓ヲ請フ

一〇〇 六月二十八日

後藤外務大臣ヨリ  
在英國珍田大使宛(電報)

依仁親王殿下ノ天皇陛下トノ御親族關係ニ付

回訓ノ件

第三四三号

一五五